



消防団員は昼夜を分かたず警戒に当たりました。大雨による磐井川の土石流対策のため警戒に当たる消防団員(20年6月、厳美町字樋ノ口地内)

山本聡・岩手河川国道事務所長
国土交通省は大規模災害に対応しようと20年5月、緊急災害対策派遣隊(TEC-FORCE)を創設し、先の地震が初めての出勤となりました。各地の災害を経験した各分野の専門家延べ1500人が集まりました。

国直轄で行った市野々原地内の土砂ダムの仮排水路掘削では地元の建設業協会と契約。重機を搬入し24時間体制で掘削し半月で仮排水路を通しました。当初は重機搬入に時間がかかると考え工期1カ月と想定しましたが、地元をよく知っている建設業者と、用地関係者の理解ですぐに重機搬入ができ、工事を迅速に進めることができました。
宿輪智浩・IBC岩手放送報道局報道部主事 岩手・宮城内陸地震では、本寺小避難所に各メディアの取材が集中。疲れている避難住民への取材がメディアスクラム、集団的加熱取材の問題を投げかけました。



パネリスト 青木俊明さん
岩手県東南広域振興局一関総合支局長
昭和51年岩手県入庁。環境生活部資源エネルギー総括課長などを経て20年から現職

計画に基づいた準備 災害時の迅速な対応に

マスコミは被災者の声を外に向かつて訴えるために避難所を取材したいし、要人の来訪もある。どうしても集中してしまいがち。不要なトラブルを生まないためには窓口が必要。新潟県中越地震などでも取材トラブルは起こりました。災害時でなく、平常時にルールを作ることができると、今後行っていきます。

被災だけでなく、ここは大丈夫だという安全情報も意識して伝える必要性が、メディアとしての課題と考えています。
齋藤 各機関の皆さんの頑張る様子をお聞きできました。続きまして、今回の災害を経験し、何を学んだのか、何が課題かを伺います。
佐藤 今回は中山間地で通信や交通が遮断されましたが、突然の大規模災害では、市街地においても交通や通信が不通になるはず。災害対策本部との連絡が取れない時は住民が集まって行動し、助け合いながら救助を待つのがいいと思います。
(次ページに続く)

まだ足りない消防団員 地域の理解がぜひ必要



パネリスト 箱石勝守さん
市消防団一関第4分団第2部長
昭和53年一関市消防団入団。同団班長を経て平成17年から現職

国直轄で行った市野々原地内の土砂ダムの仮排水路掘削では地元の建設業協会と契約。重機を搬入し24時間体制で掘削し半月で仮排水路を通しました。当初は重機搬入に時間がかかると考え工期1カ月と想定しましたが、地元をよく知っている建設業者と、用地関係者の理解ですぐに重機搬入ができ、工事を迅速に進めることができました。

マスコミは被災者の声を外に向かって訴えるために避難所を取材したいし、要人の来訪もある。どうしても集中してしまいがち。不要なトラブルを生まないためには窓口が必要。新潟県中越地震などでも取材トラブルは起こりました。災害時でなく、平常時にルールを作ることができると、今後行っていきます。

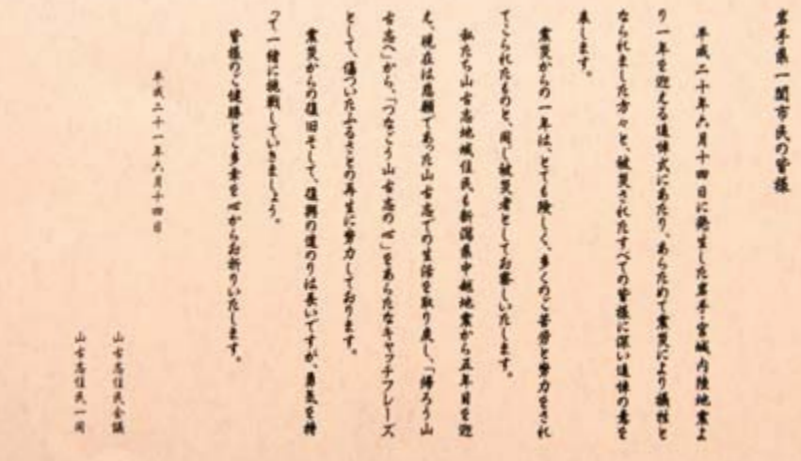
パネルディスカッションの席上、新潟県中越地震で大きな被害を受けた旧山古志村の住民の皆さんから市に送られた「震災からの復興の道のりは長いですが、勇気を持って一緒に挑戦していきましょう」とのメッセージが坂本副市長から披露されました

本寺小に避難してからは、報道各社に県内外に報道していただいたおかげで多くの皆さんから励ましをいただき、勇気ももらいました。本寺小の次の避難先は、なるべく地域のみんなが1カ所に集まって避難勧告解除

を待ち、励まし合いたいと厳美公民館山谷分館に移りました。山谷分館では、報道陣に対して自分が避難世帯の窓口となり、皆の意見を聞いて伝えました。箱石勝守・市消防団一関第4分団第2部長 実際の災害時は、上からの指示を待ついとまがありません。団員は市民の生命と財産を守ろうと、使命感で即座に被害状況の調査を始めました。道路状況、山崩れ、高齢者など要援護者の安否確認を行い、昨年の6月14日は557人、15日は455人が出動。その後も土砂災害に対する警戒などで、10月まで延べ約1800人が出動。消防団といえば酒ばかり飲んで

いるイメージですが、仕事もしていることをお知らせします。地震当日は地元の警戒をしていたので地元以外のことがわからず、後で祭時大橋が落ちたことを知った時には、とても驚きました。団では現在も警戒活動を継続しています。
坂本紀夫副市長 地震後すぐ市役所に駆けつけ、対策本部に詰めていました。はじめは宮城県沖地震だとばかり思っていました。情報が集まってきたところ、厳美の奥が震源とわかり驚きました。本市は水害対応に慣れているので、災害対策本部の設置はスムーズに進みました。

テレビの取材に応じながらヘリコプターのカメラが映す映像を見て、大規模な土砂崩れ、祭時大橋の落下などに驚きました。矢びつダムより奥は孤立していることがいち早くわかったため、緊急消防援助隊、自衛隊への派遣要請を迅速に行えました。
住民避難後の心配は市野々原地内の土砂ダムです。梅雨に入り大雨が降れば決壊し、昭和22年、23年の水害の再来になると対応に迫られました。短い期間で工事が進められたのは関係者の皆さんのおかげと感謝しています。
青木俊明 東南広域振興局一関総合支局長 県は宮城県沖地震だけでなく内陸地震も想定し、防災訓練、建物の耐震化など地域防災計画に基づき着々と準備を進めていました。民間の力も借りる必要があると建設業協会、獣医師会など各業界と災害時応援協定を締結していたので、それらが地震発生直後からの迅速な対応につながったと思います。応急復旧工事は、土砂ダムなど大規模な現場は国へ要望し国土交通省の直轄に。県は治山工事などを重点的に行ったことで、これらが早期の避難勧告解除につながったと考えます。
想定外だったのは各種視察団



立場の異なる6人が語ったパネルディスカッションの要旨を紹介します。
齋藤徳美岩手大副学長 一関の災害といえば水害。宮城県沖地震の到来はいわれてきたものの、山間部の直下型地震の発生は誰もが想定してないものでした。地震から1年を契機に、市民、マスコミ、行政の皆さんにこれまでの状況を振り返っていただき、皆さんが体験したこと、そして今後の課題を語っていただきます。
佐藤勝雄 前厳美18区行政区長 いい天気だったあの日、草刈りをしようと玄関を出ると、ジェット機が来たかのような音が鳴り、立っていられなくなりました。電気、電話、水道などライフラインが止まり、道路は3カ所も寸断されました。住民は公民館に集まって本部と連絡を取り合い、余震が強いため急ぎよ、ヘリコプターで避難しました。



パネリスト 佐藤勝雄さん
前厳美18区行政区長
平成11年から21年3月まで、厳美18区行政区長

テレビの取材に応じながらヘリコプターのカメラが映す映像を見て、大規模な土砂崩れ、祭時大橋の落下などに驚きました。矢びつダムより奥は孤立していることがいち早くわかったため、緊急消防援助隊、自衛隊への派遣要請を迅速に行えました。
住民避難後の心配は市野々原地内の土砂ダムです。梅雨に入り大雨が降れば決壊し、昭和22年、23年の水害の再来になると対応に迫られました。短い期間で工事が進められたのは関係者の皆さんのおかげと感謝しています。
青木俊明 東南広域振興局一関総合支局長 県は宮城県沖地震だけでなく内陸地震も想定し、防災訓練、建物の耐震化など地域防災計画に基づき着々と準備を進めていました。民間の力も借りる必要があると建設業協会、獣医師会など各業界と災害時応援協定を締結していたので、それらが地震発生直後からの迅速な対応につながったと思います。応急復旧工事は、土砂ダムなど大規模な現場は国へ要望し国土交通省の直轄に。県は治山工事などを重点的に行ったことで、これらが早期の避難勧告解除につながったと考えます。
想定外だったのは各種視察団